

## 初期研修を推理しながら

北海道医療センター 初期臨床研修医  
まじま けいた  
真島 慧太

お初にお目にかかります。国立病院機構北海道医療センターの研修医1年目の真島慧太と申します。同病院で同期の更谷朱里先生から、バトンを受け取りました。この記事で執筆中は救急科をローテーション中であり、目まぐるしいほど忙しい毎日をご過ごしています。

忙しい日々を過ごすとは休日には家やカフェでゆっくり過ごしたくなるものです。最近ではコーヒーを豆から入れることにはまってしまい、お湯を注いで一滴ずつ抽出させる時間は安らぎの時間です。そんな一杯の相棒になるのは、一冊の本です。特にミステリーが好きで、よく読むのでそのお話をさせていただこうと思います。

ミステリーと言っても様々なジャンルがあります。殺人や盗難といった犯罪の発生を解決するものもあれば、学園系のように学生が日々のトラブルを対処していくものもあります。共通しているのは作者が作り上げた「謎」があり、読者はなんとか解き明かそうと苦勞しますが敵わず、結局は探偵役が解決してしまうという点でしょうか。私も、じっくり何時間もかけて犯人を当てようとしたトリックを想像したりするのですが、全然当たりません。ただ、考えれば考えるほど答えを知ったときの爽快感が増すので悔しく思いながら病みつきになってしまうのです。

最近では、今までとは違った視点でミステリーを楽しむことが増えています。それは、探偵役が真実を明かすことに葛藤する描写を味わうことです。名探偵というと、冷徹で真実には忠実で謎が解き明かされれば他のことは関心がないというイメージが私の中にはありました。しかし、いくつかの作品の中には探偵役が真先に謎を解き明かすがその答えで大切な人を傷つけることに気づき、真実と友情や愛情の間で揺れ動くというストーリーがあるのです。探偵は友人や恋人のために事件解決を諦めるのか、それとも渴望してやまない真実に突き進むのかを感情移入しながら読むのは面白くてスリルがあります。そして、どちらを選んだとしても必死になって考え抜いた姿を目にするのは感動です。

そんな探偵たちですが、医師として働く自分にも共通点があります。もちろん、私は彼らのように問題解決能力の才能があつて臨床推論が得意であると



北海道大学出身で、生まれも育ちもずっと北海道です。大学生時代には塾講師のアルバイトに力を入れていて、受験シーズンでは自分が勉強するよりも勉強を教えることの方が多かった気がします。忙しい日々が続くと、昔のようにアルバイトをしていたいと思ってしまう今日この頃です。

ということではありません。当人よりも先に病態という事実を知るもののその情報をどのように扱うかに悩むところが似ていると感じるのです。

私が担当した中に、どうしても食事が少なく病態が安定しなかった患者がいました。私としては食事が進めば経過は良くなるはずだと考えているのにそれが進まず、毎日経過表を見ては半分に満たない量しか食べていないことに悩んでいました。当人にも食事のことは伝えたのですが、「わかりました」と答えるだけで自分の病気の原因が食事だけで良くなるとはあまり本気で思ってもらえませんでした。電子カルテの前で食欲が湧かない理由について消化器疾患を疑ったり、精神疾患を疑ったりとたくさん鑑別をあげましたが、いずれもうまくはいきませんでした。そんなある日、回診のときに「だって、とろみ食って文房具ののりみたいな味がするから」って言われてやっと気が付きました。ただただ“不味い”っていうのが食欲低下の原因だったのです。ここからは、嚥下評価をやり直して嚥下訓練をしながら徐々に食上げをしていきました。おいしい食事を通していっぱい食べてほしいという気持ちが伝わったのもあってか、食事は増えていって最終的には病状が良くなって転院していきました。

この症例のように、医療者側が疾患を先に理解しているものの患者様に理解してもらえないときはたくさんあるでしょう。そんな場合の一つの解決策は患者様のお話をよく聞き、よく話すことだと深く感じました。そうやって何度も会話しているうちに思いもよらない答えや信頼関係の上に成り立つ妥協点が見つかります。患者様のもとに何度も通えば、手がかりは必ずと見つかるはずなのです。まさに、現場百遍です。

自分の趣味を散々に詰め込んでしまったのでくだい文章になってしまったのでしょうか。最後になりますが、未熟さを感じながらも負けなようにと必死に働いています。この文章が読まれる頃には今よりも成長できた医師になっているように精進していく所存です。最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。